

尾崎翠「歩行」論

金 夏 娟*

1. はじめに

尾崎翠の「歩行」は一九三一年に『家庭』九月号に発表され、翌一九三二年二月に『文学クオトリイ I』に収録された短編小説である。

この作品は、小説の冒頭と末尾に同じ詩が載せられていることから、先行研究では、その「円環構造」に焦点を当てた論がよく見られる。ところで、この円形の空間移動は、「失恋」というモチーフと結び付けられ、失恋の喪失感が囲い込む空間への回帰¹、または「もはや〈詩人〉としての主体性は持たない」²女主人公の限界として論じられる傾向があった。

しかし、「私」の歩行と屋根裏部屋への帰還を、ただ片思いの喪失感のためとするには疑問が残る。本稿では「私」をめぐる環境について再考することにより、歩行の目的と、その到着地の意味を改めて検討してみたい。「私」の置かれた時代的・社会的背景を視野に入れることによって、「私」はなぜ恋に落ち、そしてその想いを忘れなければならないのか、また、なぜ屋根裏部屋に籠もろうとし、歩行の末には再びそこに戻るのかについて明らかにする。

2. 歩くこと、自覚すること

「歩行」の物語は夕方、「私」がひとり歩いている場面から始まる。「私」は夕方の風の吹いてい

る野を歩いているのだが、それは「このごろまつたく運動不足をしてゐて、ふさぎの虫に憑かれてゐる」孫を心配した祖母により、松木夫人のところへお萩を届けることを命じられたためである。

ところで、家を出た「私」は、すぐにその目的地への方向を失い、風とともに野を彷徨う。「私」は、祖母の命令よりももっと重要な目的を抱いていた。「私」ははっきりと述べている。「夕方、私が屋根部屋を出てひとり歩いてゐたのは、まつたく幸田当八氏のおもかげを忘れるためであつた」と。

幸田氏は「私」の兄の小野一助の同僚医員で、心理研究の資料を集めるための「各地遍歴の旅」の途中、「私」の家に滞在することになった人物である。幸田氏の滞在はただの数日間だけであったが、彼が去ってしまった後、「私」は屋根部屋に籠もり、ひたすら彼のことを思うようになる。

ここで疑問になるのは、なぜ「私」はそんなにも幸田氏を想いながらも、「幸田当八氏のおもかげを忘れる」ことに必死になっているのかということである。そこには、恋愛をめぐる当時の観念と、「私」の置かれた状況とが関係していると考えられる。

まず、この作品の時代的設定については、分裂心理の研究という言葉から、フロイトの精神分析学との関連を念頭に置くと、およそ一九二〇年代後半から、この作品が書かれた一九三一年の間であると推測できる。この時期の恋愛をめぐる認識とは、「恋愛を基礎とする結婚こそ唯一の正統な男女関係であると見なす、近代に特徴的な考え

*お茶の水女子大学大学院院生

方」と定義される、恋愛結婚イデオロギー、またはロマンティック・ラブ・イデオロギーに基盤を置いたものであった。「性的な関係を結婚したものの同士のあいだでのみ行われるべきものとして婚姻外の性を禁止」した、この「性と恋愛と結婚」の三位一体規範は、「夫婦の情緒的關係を基盤とする近代家族に適合的であった」が、しかし「異性を前提とする」点で限界をもつ³。

恋愛に基づいた性と結婚こそが意味のあるものという認識は、恋愛を性と結婚の前提条件としており、この認識のもとでは、恋愛は結婚という社会的制度の下に置かれ、性による〈生産〉に繋がるものとして位置する。「富国強兵の担い手として男子の価値は高まるが、女子は二流の国民とみなされる」⁴近代日本において、二流の国民が認められるためには、国のための男子を〈産む〉ことが要求されており、恋愛はその前提条件としか認定されなかったのである。

そのような状況を考えて、性と結婚に関わりのない、妄想の相手を思い続ける「私」の恋は、社会的には認められないものであろう。「私」の恋の相手は、すでに去っていきそばにいない人であり、戯曲の登場人物などのように実際には存在していない人物なのであって、そのため、その恋は現実では成就されることがない。それは、社会的観点からすれば、当然、何の役にも立たない無意味で非生産的な行為であり、また反制度的な行為とみなされる。

外を歩くということは、そのような外部の現実を自覚させる行為である。「私」の歩行は、ただ目的地に辿り着くための足の運動ではなく、外部の現実と自分の想いと対立を浮上させる過程となるのだ。そして、歩くという行為を通して明らかになる、「私」の「忘れる」ことと「思い続ける」ことという内面の葛藤は、社会秩序の抑圧の下で〈自分のいるべき場所〉を探そうとする闘いであると言える。

3. 屋根部屋の居住者

「歩行」の「私」の恋愛をめぐる問題を考える際に、もう一つ重要なことは、その恋が行われる舞台となる屋根部屋という場所である。

ある意味で家の外部であり、また、少しだけ地上から離れた、薄暗く狭い屋根部屋というその空間は、生活をするには不便かもしれないが、独りになって閉じこもる点では、他の家族から離れることの出来る個人的な空間である。「私」の祖母によれば、「ふさぎの虫」にとりつかれやすく、運動不足にもなりやすい不健康的な場所として語られるが、その不健康さこそ屋根部屋が現実から離れた想像の世界であることと同義なのである。

ところが、「私」は最初から屋根部屋に住んでいたわけではない。「淋しい秋風の音」のしなない一階の部屋に住み、祖母とも仲良く話していた「私」が変わりはじめるのは、幸田氏の訪問を知らせる、兄の一通の手紙がきっかけであった。「私」は「お客様」に部屋を譲り、一階の部屋から屋根部屋に移ることになったのである。

突然物置小屋にすぎない、暗くて狭い場所に移ることになったが、不思議にも「私」は少しも不満を言わない。「私」はすぐにも壊れた物、不用品である「物置小屋の保存品だけで」「新しい住居の設備」をする。

「設備」の最後に、「私」は祖母の反対にもかかわらず、「旧居の壁に懸つてゐた私の衣類を一枚こらず屋根部屋の壁に吊した」のである。「お客様」の滞在が数日だけであることを想起すると、「もはや秋だから、夏の服は洗濯して蔵ひなされ」という祖母の注意は正しいのだが、「私」は賛成しない。それは、この屋根部屋という新居がもはや物置小屋ではなく、自らが所有する空間という印象を与えようとした行為であるように見える。そのままごとのようにもみえる行為は、屋根部屋という空間の中では、「私」が事物に新しい意味を与える主体的存在でありうる可能性を示してい

よう。

だが、それはまだ当人には自覚されておらず、現実的に屋根部屋は生活に適した場所ではなかったため、七日も経っても幸田氏が来ないのに対して「私」は「もう旧居へ帰つてしまはうと考へて」しまう。

しかし、幸田氏の訪問は、「私」を大きく変化させる。その変化とは、表面的には彼への恋と失恋であると思われるが、もう一つは、屋根部屋という空間の意味について自覚する契機が訪れたことである。「私」は、屋根部屋という空間が、現実からかけ離れた空間であり、田舎の〈普通〉の女の子である自分が、望みさえすれば、何にでも変身できる場所であることを自覚する。

単なる「物置小屋」にすぎなかったその場所は、「私」に新しい意味を与えられることによって、想像を可能にする空間へと変化する。〈地上〉の人は知らない自分だけの秘密の場所。そこでは、「私」はもはや「うちの孫」や「お祖母さんのうちの孫娘」ではない。幸田氏という人物の登場は、それを自覚させるきっかけとなったのである。

4. 屋根部屋への帰還

戯曲全集の朗読が終わると、幸田氏は「つひに大きいトランク一個とゝもに」去ってしまう。それに従い、「私」は彼に譲っていた、一階のものと部屋に戻らなければならない。しかし、屋根部屋という空間の意味を自覚した「私」は、以前の生活に戻ろうとはしない。そして、最初に触れたように、屋根部屋に引き籠もっていた「私」は、祖母の命令で外出した時に、幸田氏のことを忘れようと努力するのだが、結局はそれを断念する。

その歩行の途中、「私」は「実物を見ると、まるで詩が書けないといふ思想を持つてゐる散歩嫌いの詩人、土田氏の二階の部屋で、狭い塚のなかの「季節はづれのおたまじゃくし」を見る。卵から一度目を覚ましたおたまじゃくしは、再び卵

の中に入ることも、そして塚の外で生きることもできない。「私」は、塚のなかでしか生きることのできないおたまじゃくしを見て、もう屋根部屋の外という現実の世界では生きることのできない自分の姿を重ねたのではないだろうか。そしてその後、「私」は、屋根部屋に戻るのである。

この作品は、小説の冒頭と末尾に同じ詩が繰り返して配置されているため、物語は円環する構造になっている。最初、幸田氏のことを忘れようとした「私」は、風とともに野を歩くのだが、その思いは「野に捨て」ることも、「風にあたへ」ることもできなかった。屋根部屋に引き籠もり、社会の秩序からかけ離れた非生産的なことばかり考えることと、そのような非現実性に惹かれる想いと、現実連れ出そうとする日常生活の狭間での葛藤は終わらず、「私」は苦悩する。

しかし、「私」の心のなかでは、最初からその歩行の目的地が決まっていたのではないかと考えられる。冒頭と末尾に載せられた同じ詩により、物語は最初に戻り、「私」は屋根部屋に回帰する。そして屋根部屋を出た「私」の目的地は、松木氏の家でも、土田氏の下宿でもなく、自分の屋根部屋だったのである。したがって、一見、目的地を失い、〈彷徨〉しているようにも思われるその歩行は、実は「私」の心では最初から目的地が決められた、小さな、しかし固い意志を秘めていたものと読み取れるのである。

そして、屋根部屋が、現実から離れ、想像をはぐむ空間でありながら、その想像を〈表現する〉ことを可能にする象徴的な場所であることを想起すると、本文では直接に言及されていないが、屋根部屋への回帰を〈表現する〉すなわち〈書くこと〉の寓意として捉えることもできると考える。

そう考えると、屋根部屋に戻る「私」の行為は、虚構の世界としての詩や小説を〈書く〉という、〈表現者〉としての意志の暗示と見ることもできる。歩行の末に屋根部屋へ回帰した「私」は、脚の散歩の代わりに、頭の中の歩行を始めるのだ。

すなわち、屋根部屋に戻ることによって、「私」は主体性を獲得し、むしろ〈表現者〉となる可能性を得ているのである。

5. 終わりに

幸田氏との出会いにより、「私」は屋根部屋の住民になり、そこでひたすら一人で恋をする。一階の祖母は、そのような「私」の恋については何も知らないが、孫が何か一般的な秩序から離れようとしていることには気づいているように見える。祖母は、「私」を一階の、現実の世界に連れ戻そうとする。「私」が無理やり恋の想いを忘れようとするのは、このような社会的状況の抑圧のためにちがいない。

しかし、葛藤の末、「私」は想い続けることを決め、地上の歩行を経て再び屋根部屋に戻る。確かに、そのように屋根部屋に籠もり、実現できない恋ばかりに夢中である「私」の行為は、社会的に何の役にも立たないものである。だが、そのことはむしろ、一見、悲しい失恋の物語としてとらえられがちなこの作品が、実は現実社会に対する反抗の姿勢を隠し持っていることを明らかにするだろう。「成就しない恋」であると知りながら、そうした失恋に近似する恋の状態を続けること、それは、社会的に何の力も持っていない、小さな存在である「私」にとって、社会秩序に恭順することを拒んだ「私」なりの強い意志の表現であり、また寓意的には、〈表現すること〉＝〈書くこと〉への意志として読み解くことができるのである。

注

- 1 「目的の達成しないままの帰宅（出発地への帰還）は、「私」が振り出しに戻ったことを意味しよう」近藤裕子「尾崎翠「歩行」の身体性一風とお萩とおたまじゃくし」（『国文学』二〇〇三・四）八六―八七頁
- 2 「『歩行』以後の町子は“詩人＝表現者”というよりも“恋する女の子”としての色合いが濃く」、「決

して手の届かない遠い場所にいる存在であると同時に、町子の個を離れても尚彼女の心と体を支配する絶対的存在」としての幸田氏に恋を寄せる「私」は、「もはや〈詩人〉としての主体性は持たない」鈴木ちよ「尾崎翠作品に於ける〈女の子〉の彷徨―『第七官界彷徨』『歩行』『地下室アントンの一夜』を中心に―」（『国文自白』二〇〇七・二）九五頁

- 3 井上輝子他編『女性学事典』（岩波書店、二〇〇二）四八八―四八九頁
- 4 久米依子「少女の世界」『岩波講座 文学 六』（岩波書店、二〇〇三）一〇八頁